

〈祈りのために〉

「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、」（イザヤ書9章6～7節 口語訳）

わたしたちのために生れ、与えられた、この「みどりご」の肩に「まつりごと」はある。このみどりごこそ真に王と、預言者イザヤは宣言した。同時に、当時世界に対してその権勢を押し立てて、主の民ユダ王国も不安にさせていたアッスリヤ王ごときは、真に支配者であるのではないことも示した。先ず主の民に対して、そしてすべての人に対して示したのである。

イザヤの預言した王はダビデの家系から出ることが父なる神に定められていたのであるが、その誕生はこうなった。マリヤが「初子を産み、布にくるんで、飼葉桶の中に寝かせた」夜、御使により、イザヤの預言の成就が宣言された。先ずベツレヘム近郊の羊飼いたちに、そしてすべての人に向けて宣言されたのである。「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである」（ルカ2:1～14）。

権勢を押し立てようもないように、御子は、飼葉桶から地上でのその「まつりごと」を開始された。これが、父なる神によりその肩に負わせられたもうた「まつりごと」である。そして、御子の肩の上には十字架も負わせられることが避けられなくなった。御子の十字架には、ここで担われなかったならばすべての人を押し潰し、最後には地も押し潰してしまうしかなかった罪が載せられた。御子は、この十字架を担い通された。こうして御子が、「世の罪」（ヨハネ1:29）を取り除きたもうた。御子が、罪の赦しによる御国の支配を地において揺るぎないものとなさった。この御子こそ「平和の君」（イザヤ9:7）であられる。そこで、御子は、父なる神により「天においても地においても、いっさいの權威を授けられ」たもうた（マタイ28:18）。御子は、その「まつりごと」を、今や、至上の主権者として遂行されている。その御座は、「とこしえに公平と正義とをもって」（イザヤ9:7）保たれるのである。

まつりごとは、これを一人ひとりその死んだ後にまでヤスクニにより及ぼそうとしているような為政者には到底担い得ない。まつりごとは、公平と正義でなく、ヤスクニをその支配の礎としようとしているような為政者にはよく担い得ない。それゆえその支配では、平和を目指すことすらなくなってくる。その支配は、今、御子の御支配に目に見えて楯突くものとなってきているのである。これは、聖書の御言葉に基づく信仰が与える認識である。わたしたちが、御子から賜っている認識である。このようにしてわたしたちは、今の「曲がった邪悪な時代のただ中であって」（ピリピ3:15）至上の主権者なる御子の御支配の下にある。このわたしたちには正義を行うこと、為政者を正していくことも求められているのである。

祈り

「至上の主権者であられる御子を仰がせ、主の民として、今の為政者と正しく関わるように導いて下さい。」 篠塚予奈（東京告白教会牧師、大会靖国神社問題特別委員会書記）

父の徴兵忌避（2）

金澤道弘（上田教会長老）

1918年、松本市で教員生活のスタートを切った父も「白樺」を購読し、強く共鳴した。その後岸田劉生に深く傾倒して、1919（大正8年）の夏休みに単身神奈川県の鶴沼の劉生宅を訪ね、数日間寄寓した。19歳の父は、1年後に迫っていた兵役検査の悩みを訴えたのであろう。劉生は近眼で軍隊経験は無かったが、示唆が与えられた可能性がある。「大正デモクラシー」と「白樺派」は父に大きな影響を与えたが、それが父の「兵役忌避」の決定的要因となったとは考えられない。全国に何千人もいた白樺派の青年達に、徴兵忌避の気配がなかったからである。若い父を動かしたものは、本質的で力強い不動の真理に立った価値観であって、「白樺」購読以前から父の心を捉えていたキリスト教であった。

すでに明治30年代に、多くの先覚者が「戦争反対」を叫び「社会主義」を唱えたが、その共通の出発点にはキリスト教があったように、キリスト教との出会いが父の良心を形成した。晩年の父の記憶によると、幼少の頃、キリスト教の「宣教師」が村の諏訪神社の境内で、子供たちに「主われを愛す」という讃美歌を教えたという。これが父とキリスト教との最初の出会であった。父は、若い時にしばしば上田教会に通ったようだ。聖書の「汝殺すなかれ」「剣を捨てよ。剣を取るものは剣で滅びる」の言葉が深く心に刻んだのであろう。父の「兵役忌避」はこの御言葉に導かれていたに間違いない。

父の徴兵忌避を導いたもう一つの要素に、「トルストイへの共感」がある。1904（明治37）年、日露戦争が始まると、トルストイは猛反対し「私はロシアにも日本にも味方しない。政府に欺かれ戦争を強いられた両国の労働大衆の味方である」の意見を新聞に載せた。ロシアで発表を禁止された彼の論文は、ロンドンのタイムズ紙に掲載され、驚くべき反響を世界に巻き起こした。「平民新聞」「朝日新聞」にも訳され、日本の非戦論・反戦運動を促した。

父は、真面目な信仰者であったと考えられる。教会で洗礼を受けて当然だと思われるが、そうはならなかった。戦前の日本に「真実の信教の自由」がなかったために他ならない。明治憲法下の教会では、天皇と政府のすすめる戦争に反対したりして、兵役忌避を認めることは不可能であった。当時の教会には、父の居場所はなかったのである。トルストイがギリシヤ正教会から破門されたように、父も「孤独な信仰者」として戦争の時代を迎えた。

1924年（大正13年）父は小学校を退職して、岸田劉生の弟子となり画業を学んだが、岸田劉生の急死で故郷に戻り、家庭を持って再び小学校に勤務した。だが年ごとに軍国主義の色彩を強めた学校での教員生活は彼には耐え難く、1945年（昭和20年3月）、45歳を前に豊殿小学校を退職した。ポツダム宣言受諾の半年前だった。以後生涯復職することなく、田畑を耕し9人の家族を養って、絵を描き続けた。生活は楽ではなかったが、若い時代に与えられた信仰のおかげで、楽天的に生きたのである。

1995（平成7年）2月、父は教会で洗礼を授かり、間もなく死亡した。94歳であった。父信一の親族にキリスト者は皆無だったが、1980年以降、親族・縁者で洗礼を受けた者は17名に及んでいる。これは、父信一が生涯にわたって培った信仰的土壌と無関係ではないと思われる。

<良書紹介>

ジョン・グリーン『神都物語—伊勢神宮の近現代史』吉川弘文館 2015年、1700円+税

著者は、京都の国際日本文化研究センターの歴史学者ジョン・グリーンである。本書の題名である「神都」というのは、志摩半島（三重県）に位置する伊勢のことで、日本で最も重要な聖地の一つである、と著者は述べている。この地には天照大神を祀る内宮と豊受大神を祀る外宮の二つの社を中核に、14の別宮と109の摂社・末社・所管社を含む125を数える神社群が存在する。その中でも伊勢神宮は、明治以後、国家が一貫して優遇した神社（もう一つは靖国神社）であり、現在では日本の8万の神社を統括する神社である。

さて、伊勢神宮は、時代状況にあわせた変容があった。江戸時代までの伊勢神宮と天皇、国家および国民との関係は、明治以後のそれとは、全く異なる。ことに、明治以後の伊勢神宮には、変容の三つの転機（節目）があった。第一は明治維新における天皇を権威づける存在としての伊勢神宮、第二は、終戦の1945年に国家の護持を離れ、宗教法人化を行った伊勢神宮、第三は、2013年の式年遷宮に安倍首相ほか8名の閣僚が出席したことによる国家との関係が強化された伊勢神宮である。

まず伊勢神宮と天皇の関係であるが、伊勢神宮にとっての根源的な存在は、天皇である。ただ、伊勢神宮の長い歴史において、天皇との関係が一貫して親密であったわけではない。むしろ、その関係は中世から近世をへて近代へと薄れていく一方だった。しかし、明治になると、政府によって、それまでになかった親密な関係が神宮と天皇との間に造られた。神宮と天皇は、大正から昭和にかけていっそう親密なものとなるが、戦後にはその関係は動揺する。しかし再び戦後の式年遷宮を契機に徐々にではあるが密接になっていく。

次に、伊勢神宮と国家の関係であるが、近現代史において、神宮が政治と密接に繋がっていることは明らかである。しかしながら、伊勢神宮と政治との関係も一貫していたわけではなく、戦後は伊勢神宮が宗教法人となり、政治から離れていく。神宮は一旦は法人化したのが、次第に脱法人化の動きをみせ、国家との関係の新たな可能性を探っている。それは戦前の国家神道の反省から、神社と国家の政教分離が憲法によって定められておりながら、2013年の第62回の式年遷宮に安倍首相および閣僚が参列したということにみられる。天皇儀礼である遷御（神々の移動）当日に参列した総理大臣は、安倍晋三だけである。（なお、「日本会議」は安倍政権と呼応して、憲法改悪の為の署名活動を行っているが、伊勢神宮大宮司・鷹司尚武、また神社本庁総理・北白川道久が、その「日本会議」の顧問として名を連ねている。）

伊勢神宮と国民との関係のことであるが、1973年と2013年の式年遷宮の宣伝や地域開発などによって参拝者の数は増加している。また国民からは莫大な寄付金が集められている。2013年の式年遷宮にかかった570億円の一部は、天皇と皇后が献進した「御内帑金（ごないどきん）」であるが、莫大な経費のかかなりの部分が国民（参拝者や奉賛会という全国的な組織）による寄付金であった。本書は、「今も昔も変わらぬ」歴史を超越した伊勢神宮ではなく、伊勢神宮と天皇、伊勢神宮と国家、伊勢神宮と国民といったところに視点をおき、時代状況に合わせて変容してきた近現代の伊勢神宮を分かりやすく記している。

（多摩ニュータウン永山伝道所牧師 栗田英昭）

〈ヤスクニ・ニュース〉

明治維新 150 年と改元の危険な符号

1868 年の明治維新から 150 年を迎える 2018 年、政府はさまざまな記念事業を展開する。一方、安倍晋三首相に近い議員らの間では「明治の日」を制定する動きが本格化している。折しも政府内では、2018（平成 30）年の区切りで天皇の退位を実現すると共に、19 年 1 月 1 日に皇太子が新天皇に即位し、同日から新たな元号を適用する案が浮上した。「明治ブーム」と改元が連動すれば、安倍政権に色濃い戦前回帰志向が一段と加速しかねない。（東京新聞 1 月 12 日）

〈抗議声明〉

大会靖国神社問題特別委員会は、「首相の伊勢神宮参拝に対する抗議声明」、「防衛大臣の靖国神社参拝に対する抗議声明」、「オスプレイ撤去を求める抗議声明」を政府に出しましたが、防衛大臣に送った声明文をここに載せます。

防衛大臣 稲田朋美 様

防衛大臣の靖国神社参拝に対する抗議声明

わたしたち日本キリスト教会靖国神社問題委員会は、貴職が 2016 年 12 月 29 日に靖国神社を参拝したことに対して、厳重に抗議いたします。

そもそも一国の責任ある立場の政治家が特定の宗教の施設で参拝することは、その宗教に肩入れすることになります。この参拝は日本国憲法第 20 条 1 項、「いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない」に明らかに抵触する行為です。

ご存じのように靖国神社は 265 万あまりの戦没者と共に、A 級戦犯 14 人をも「神」として祀っており、そのため参拝は国内、国外に重大な問題を引き起こします。まして貴職は、安倍首相と共に真珠湾を訪問し、世界に向けて日本とアメリカの和解を強調したばかりです。貴職の靖国神社参拝に対して中国と韓国から厳しい批判の声があがっただけではなく、アメリカ国務省当局者も「われわれは歴史問題には癒やと和解を促進して取り組むことが重要だと強調し続ける」と述べて、不快感を示したのは当然のことといえます。参拝は日本とアメリカの和解をも疑わせせることを世界に示す結果となりました。

貴職は参拝後、記者団から中韓の反発について問われた時、「いかなる歴史観に立とうとも、いかなる敵味方であろうとも、祖国のために命を捧げた方々に対して感謝と敬意と追悼の意を表するのは、どの国でも理解をして頂けるものだと考えている」と発言しました。詭弁によって世をかき乱さないで下さい。私たちは同胞である日本の兵士が戦争で命を落としたことを悼むものでありますが、ここに現れた考えには強く反対します。靖国神社に祀られている兵士たちは、外国の侵略から祖国を守ったのではなく、戦前・戦中を通じて軍国主義体制の下、八紘一宇の精神が国民に刷り込まれた結果として、外国への侵略の一端を担わされたのです。貴職は言葉巧みに日本の侵略戦争を肯定しようとされますが、これは良識ある日本国民からも、国際社会からも支持されないことを知るべきです。

私たちはイエス・キリストを神と仰ぐ立場から、日本が政教分離の原則を堅持すると共に、二度と戦争をしない、真実の意味での平和国家になることを求めています。この観点から、防衛大臣である貴職の靖国神社参拝に反対し、今回のことを謝罪し、これ以上靖国神社への関与を繰り返さないよう強く要望いたします。

2017 年 1 月 13 日

日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会 委員長 井上豊

745号ヤスクニ通信2016年2月12日
発行 日本キリスト教会
靖国神社問題特別委員会
発行人 井上豊 編集 川越弘
発行 衆広国（大和教会）
〒242-0021 神奈川県大和市中
7-1-22 TEL&FAX 046-261-3957